

したまふ。周巷の人らおそく業とせざるあり。齡七十年子及
ても壯志あり未だ減せず。天下邦名の淵源を窺えんと思
ひく奮然と心をもひり。帝都小多し西のく出雲の大
社子訪ぐ南北方紀妙態野の邦窟を極望慨然とく
嘆て云く邦名の政その明夷あるも千歳此今日とて毛
聖徳皇太子乃業とて毛をあらへく譲すすとて邦不第
居すると三年遂に天聰不建たるくく六曾てあそく
三程邦蕃傳ありくに後重十寶傳をりて姉少孫公文卿子よ
ましく進致す帝の書を殿院ありくくくも翁の國の宝
ありと宮の口をくくくハ年十七小老くくと嘆くもたあそく
とくや九條左大臣尚実中書とてまもひ偏室を江戸子傳

ても音同絶えぬせきせり。これより先子貞保十三年戊
申の夏ヤンとあき方あり仰とを書り未だ本紀の中
る曉くもくきとを書を書し注解くく秋入きありありこれバ
やぐくあそくよりぬまは沼田侯素あり大経を言信せくく
めて好尚お伴く候もやく段とてくも蘭英尤篤くくく
をくその全録とて書をあけくもその地も候佐倉侯園
那侯とてかほの学びりり延享元年甲子此夏善明吉
主澄海をりく寺地を偏室が舊宅子移して改めく律
苑よりくを此田園資財をりてくく持待僧伽の費と
せり甲申正月元且子偏室をりくくの子もくく吾輩畢
まり今日よりくく存かや生とてくも死の如くあそく

予も予子告げ知らすまゝあるにありし其の年此春の
 季あり疾ひ目を追く重く身ありし前旨證海抄及び
 門弟子を顧みく身持の事とて喩く明和元年三月十七
 日終白身を又て泊然とて逝せり偏幸為年よりくより
 膝を繰りありし要がず久嗣れし其の終身たるものを
 四百餘人とあり天和元年三月十三日生れ享年八十四
 善明律院小葬る

美成云偏幸のめんをいそめ号陰あくる先代舊
 奉本紀といふかあとの名を舊奉大成経といひ
 ひく一古社小祝め細りありし舊記よりとつき
 美濃國あり美濃北湖者とあり福傳の敷郷



て正部三十八卷副部二十四卷ありて七年二
考を撰述して聖徳太子の勅旨を撰充たるか
里をやく正部甲考ハ列終すありハ鮎鯨大成
経と題して活字乃印板ありされども世ありて
毀板ありを撰たあり世子述りそのくりきと
ハ編年為り傳子二るありれども未だ
佐々木玄龍

佐々木玄龍

佐々木玄龍字ハ煥甫池菴と号せり通稱弟次郎慶永
三年八月二十七日子生る幼あくく心ヲ篤學の業は
あゝ筆録真州の諸體うねあせきとあゝ天和二年ハ
月轉使來聘子ありて轉人と唱詞若干篇あり正徳元年

十月又轉使より命を蒙りて唱砂するを始り且
轉國抄卷の書をくく身保四年九月古六轉使と唱砂
す同く六年六月病を告げて骸骨を乞ひ遂に致仕
八年二月二十二日病を没す享年七十口歳其の三縁山
下淨運院に葬る

佐々木文山

佐々木文山ハ玄龍の弟あり名ハ淵龍文山ハ字あり善書
をりて世子也をりて人となり教敏爽邁の氣性あり
いさう古物と屋せり幼より書と善し長とありて文學を
好み諸子百家通せり義録の秘蘊をきりて
兄玄龍と名の書名齊しく善なりこれ孝法にありて古を

師とせりその門下遊ぶりの最多りあるのこゝろに諸侯
のほひ學ぶるも多かりしが文山万治二年二月二十二日誕生
北登歳三松侯に仕へ禄を禀け業を修めりしに戸子
居任せり文山いまだ大老に至らずしてその世を遂ん
てをおとひくもやく老を養ふの志あり享年七十七
歳ありしに享保二十年五月七日没す葬地兄玄龍に
おなじ

皆川淇園

皆川淇園名八惠字八伯恭淇園は其の号あり又第百と
早す年四十五歳の頃よりやく文字を識けりされは其の
父試子杜甫が叔典ハ多の詩と書てあえたりしに日あり

す讀抄をえりしにこれあり存日毎子課せり書をよめりしに
一色ありしに能能忘るるに外し其の弟成章も亦風雲の少
えありしに父孝子世儒記用の学を鄙めりしに明經弘
厚の志ありしに其の弟巳子老たれは其の事業を為らん
と難しと自歎し二子に命じりしに其の志を継めり經史百
家の書やその用尺を資けり学識を長すべきもの必要む
おこしこれとあえり書射の宿儒博達の人よりあやむる文
を結ひ往來せりめたり成章ハ辨論を聞けり子字修り諒の
畢るを結ばり淇園ハ蒙昧不愈の若れ如く委を究ての存
於經國にやありしに二子の後方を辨すもあきしに其の
く古今の載籍に涉り平小達も其の若ししに必披

意をきかめて菴をさすといふあり十五歳の時にあつて身
成章と曰く一書傳の神書子達ひく席上唱和の詩種乃
ありこれハ神人を發する一書を海外ハ馳せり其國ある所
文を以て一老儒示ししを正を乞ふその人教字を改めた
るの其字義を問わ改めざる文字や後を以ておやゆと答
ふその故を辨ずる事ありき其國私に抄りし文字義を
知らざれば文を傳ふ事とあはれまを經義もよく解らざる
んとてこそまより文字の心を潜たれど字書の訓詁ハ多くハ
假借もく実を傳ふ事とやう古人用字の例を類集してそ
の程を深き抄ひの通曉する事ハ亦くして多形もあつて声
音も求めり始て言外の妙所を傳ふるこれハ名物の義を

全く聲音小本くとて傳りて之を聲小生ハ抑子生ハ物
ハ天地子生ハ陰陽四射の常あるもの之が及極ハ終る性
情小書ハ聲音子發ハ民音小著るがや為子易の說卦
傳子神ハ易物小妙小く言と為る事ありき聖人乃
道ハ名を辨ずるを要と名明かきハ物察せざる物察
せしこれハ文義一平く著まり易繫辭傳ハ易ハ何
れ為子する者をや物を用くを務と成す又云用き名
著り物を辨言と平く著すことなりこれ小於て朱墨
の著るを伝らむけ彼と我とを分ち内外を立て玩索す
ると教年ありき其書の易子本くと成知りし音を定
免象を記しこそが法を式としき名物の義を用き子

即禮微の極く君子のついでに通曉すべしと云はれぬて疑ふ
と云ふ此の渙然氷降しく名義すべしと云ふ文程を以て
て晰ありこれより古人の書を讀み白日を掲ぐと並
行が如く成り成章うて海園が学識を推展し終り及ぶ
ずとせむひそと小國史を學ぶを以て自一家をおこす
海園こころに於て用物の法よりこれを六經諸孟左國など
の書を徴し一考引金通りて書に孝悌忠信仁義礼儀
を釋して名勝六篇を修り易詩書儀礼戴記春秋
論孟學庸の釋解九を教百篇を言ふ世小行を以て
さう易子於て力をを用ふる最速く義をせむひそ
ゆもバ終宵睡しつる晨起れ子對し明々を俟ち食す

多小もその書をくくるとは並きて讀つる晷のついでに
おぼえざうくとありまゝ門人の事りて教をうくるあり
もあまひハ客と談話すことと抄子對するまゝ坐せり
すことありその人歸り退けが書を讀むとまゝ初めの如
されバ奴婢れられ室を掃ふとありとも海園が坐しおま
むす一日海園が化鈔をくくひと机色に塵を掃むんと
くその坐を足すも厚席の扱れ疏きて穩坐しつるとまゝ
その席を徹しく林まどもすくふ腐たりとこれ讀書の
勤勉よの常ありさるを知りて文化乙丑の歲西隣か
る地を穿り學堂を建て弘及報と名つけ春秋二仲小
先聖を祀り礼儀を講習しつりて卯此に及病て不食す

且夕學を講じ弟子を率ゆること平生の志
を五月十六日小寝の徳小う京極河原陀古子英の私子謙
しく弘及先生とす。淇園の人とあり。温厚沈毅人子
接するに寛みよく行ひて謹あり。父母に事するに至孝
あり。父性悲愍を好めり。自ら風疾あり。轎に乗ることを
たぐ。淇園官に告げて車を遣り。父を乗せ。僕小轎に躬
自看護し。つと甚りせし。と。淇園常子弟子と述す。その
威ありて。嚴あり。愛すも。と。押あらず。鍾紳先生あり。
學士大夫より。おほい高愛。農家の子と。と。も。鷹揚いさ
さうも。別あり。と。あり。う。送迎。つ。義子あり。これ。權
と。ども。屈せず。礼小。何う。さま。を。厚謝。と。と。も。性。く。と。す。

その門子なるもの凡三千餘人平生人れ毀譽すこと。と。ども
さう小意とせ。性柄を嗜み。絲竹の調べ。と。の。と。と。とい
て。と。も。少。し。も。淫酒と云。と。あり。書をよ。と。と。右軍をよ。と。ら
こ。と。び。く。臨。り。畫。を。ゆ。や。あ。を。て。一掃。す。の。と。晩年書畫
と。も。小。大。子。進。り。を。を。これ。を。慕。ひ。門。子。と。り。て。護。ひ。の。ゆ。え
む。の。の。終。え。ん。率。や。く。遠。き。を。お。ひ。を。り。て。世人。子。名。評
さ。を。を。骨。と。せず。詩賦。又。素。の。と。き。ハ。心。子。抑。り。を。と。小。隨。ひ
言。を。んと。欲。す。と。と。草。を。下。也。ハ。筆。然。と。と。と。三。草。を。成。せ
聖。ま。あ。こ。力。を。用。を。と。れ。と。と。を。り。て。著。述。き。を。あ。て。寫。り
淇園事保甲寅十二月。日子。生。れ。文化。丁卯。五月。十六。日。享
年七十。四。歳。子。て。没。せり。

富士谷成章

富士谷成章字ハ沖建むの層城と号し後その居宅の
地名子ありくハ多と号せり皆川淇園が弟あり三歳
書をよ〜七歳あり詩を賦せり九歳の夏旆使の來
聘あり〜旆旆人と号談せし幼して才氣のいちを
き忘るの速あり子旆人も舌を卷て嘆賞せしとそ長と
あり子及びび〜羣書を涉獵し自他知らくを控るを
とゆもの月をいやし耳を貴く世北人の常あり聖人
とのども異國の故の〜吾邦乃典友を学少子あるんとして
國史律令の〜もさあり家業を継集まであまねく搜り
ゆめて究めず〜とれ〜あり皆川淇園淇君孫と

おる〜成章が叔父ありあり舎して百題を〜午附す
皇子附を〜限りとしておの〜五律を賦す子淇園を
々就けり君孫次ぎ〜執る成章ひとり居る小人〜平日
の款情敏捷あり子似ざるをあや〜とふるふるの出すよおのひて
百題子あり〜わが一をよとそ〜子控て坐せ〜挙る
太子服せりとのり享年四十二歳淇園子先づりて没す

美成云詩人の物を誦す子すして唐土の故事の〜
おの〜仰り出て吾邦の〜子やふりの最少〜さ
て吾邦の故事を詩料子用ひ〜る日本詩史子載
す〜ところおの先生の雪の詩も〜巧〜
世人の知る〜ところありこれ子次ぐの能ハ成章が扇と

詠すもの七行あり

用時蛾蝶巧控翅搦去鷗鷺不發声大堰錦
波春十里弘微繡帳月三更賦其秀娃載詞
藻按譜才兩擅品評抵自五絲紫七骨由來
担得合歡名

くろく此ハ初澤兼學不して且錦人繡口の才人子あ
ざればよくすことあそむ成きあつ著述の富く程百
種子及び詠すものころのあや生涯子万首ありと
ども今つとあるおれりの一冊の詩ハ一夜百その外世
子傳りあひそるるつとこの扇を詠すもの詩を見
るのころあつとこふあつと

遊女依香保

依香保く遊女ハ江戸新吉原ある角町の並本屋
左邊のぐ抱えまく風姿うらやま嬌面玉れどく艶態
を欺くの粧ひあまのそあそ志くは優しくされハ全盛
うきうき如うル里正保年間十月の浪小雨そがうり
いろあやういろ緑髪を拂ひ截りく廓をおきれ出で
翌朝市司局へあつてあやうやうの妻年未發心の
切あつとそどもを公の身あまどん子但を侍らすあ
ひひひまうまはれ念やうううやうふ髪をさしひう
もこれあやうあり侍りぬれそくハ妻う志をあられあ
ひひくまあまを居せられ暇をやるうやう子仰こ

とわんこそやうに形ひなるこそありと涙泣くもぞあは
まは遊女佐香保八官やうにとめおうれをなを召してそのよ
し仰せらるるに抱の中かかある遊女あそびのまれば主人しゅじんにふりあ
す無くとありはるふまをな中なかあたるやうに佐香保さかほと幼
より抱えおきつるひけで意い憤ふんあるものにてまももあ
そうあはれ勤めゆへに今いまは彼かれが形かたちひふあせく暇ひまをつら
し聖せいはあま子こ出家あつげと遠とほきを信まんそくやうて長谷川ながせがわ所
ある本ほん立たちといふ難なん金かね子こく難なん髪かみゆなしく佐名さなをな
尾おといひはりまてまをな三さん軍ぐん勢せいの地ちをなすこそ竹たけ菴あんと
結むすひくゆき了りやうとて佐香保さかほ三さん談だん子こ一いちおあれハ一いち累るい
と増ますとくや妻つま家いへあんハうりく累るいありとて二に五ご名な子こ宗むね居い

あく香かをたき念ねんをなへ佛ぶつ事じのまことなり
あく信しんのよなる信しん子ことすなむ聖せい子こあれハ病やまま
ためずといふ古こ字じをな常じょう善ぜん授じゆけたぬといふるらんそ
もそ色いろ二にの佐香保さかほが發はつ心の世よひ起おこるよりはうぬて乃
聖せいとふとぞ実まこともあその渡わた西さい國こくあるある候こうのまもあ
久く名なを梅うめと呼よびし壯さむらい士しあり年とし來き佐香保さかほ子こあし
ひらりし子こ私し形かたちぬとましくおらる子こ本國ほんこく子こ赴おもむくといふ
別の金かね情じやう二にもやう子こ又また来きん年としの再さい會かいをいひと懇ねんふひら
をく終はつらうしがその年としに秋あきもろかや世よをまやうといふ失うせ
子こ夕ゆふのされどあせ世よありしあせお佐香保さかほがことと子こ滑な
息いき子こくこのおを副たもとく賜たまうたりその文ふみ乃なおくふ